View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

情報リテラシー育成のための学校図書館における学習環境デザインに関する研究　[論文要旨及び審査の要旨]

著者	塩谷　京子
発行年	2016-03-31
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第596号
URL	http://hdl.handle.net/10112/10215

[3]

氏　　名	塩谷（しおや）　京子（きょうこ）
博士の専攻分野の名称	博士（情報学）
学　位　記　番　号	情博第 52 号
学 位 授 与 の 日 付	平成 28 年 3 月 31 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学　位　論　文　題　目	情報リテラシー育成のための学校図書館における学習環境デザインに関する研究
論　文　審　査　委　員	主 査　教　授　久 保 田　賢 一
	副 査　教　授　久 保 田　真 弓
	副 査　教　授　黒　上　晴　夫

論 文 内 容 の 要 旨

塩谷京子の論文「情報リテラシー育成のための学校図書館における学習環境デザインに関する研究」は、全 7 章から構成されている。以下、各章の要旨をまとめる。

序章では、教師主導の「教える」授業から学習者が「学ぶ」授業への学習観の転換に伴い、学校図書館の新しい環境整備の必要性が増したことについて論じている。従来の学校図書館は、本好きの子どもが放課後に本を読む場として捉えられていた。しかし、法律が改正され、学校図書館はすべての子どもが学習する場として、情報センターの役割を担うようになった。それは単に教科の学習を行う場としてだけでなく、情報リテラシーを培うという意味を持っている。そして、子どもが情報リテラシーを習得する場として、学校図書館の学習環境をデザインする必要があると論じている。

第 1 章では、学校図書館を授業の場として活用する際の課題について論じている。まず、学校図書館は各自治体により整備されるため、地域差が大きいことである。図書館に司書を配置しなければならないが、2 割ほどの学校では司書が置かれていない状況である。次に、司書教諭の仕事に図書館で授業を行うことに関する内容が含まれていないことがある。そのため研修を行っても図書館での授業は十分に行われなかった。調査によると司書教諭が配置されているにもかかわらず、「新聞・雑誌の使い方」「電子メディアの使い方」「レポートのまとめ方」について 90%以上の子どもが指導されていない状況があることが明らかになった。

第 2 章では、学びの場としての学校図書館に関する先行研究を分析している。先行研究によると、司書教諭と担当教員が協働して授業を行うと効果が上がるという事例が報告されている。また、図書館を利用するための「教師用ガイド」を作成している地域もあり、その効果についての研究もある。学校図書館を有効活用するために、担当教員と司書教諭が協働し、子どもの情報リテラシーを育成することが求められている。しかし、新しい図書館に必要な「授業」「子ども・教員」「情報・資料」の三つの要素を俯瞰し、学校図書館を機能させていくという観点ではまだ研究が十分に進んでいない。

第 3 章では、先行研究の分析をもとに研究の目的と方法を具体的に提示している。授業を行う場として学校図書館を機能させ、子どもたちの基礎学力として情報リテラシーを育成できるような学校図書館をデザインすることが本研究の大きな目的である。そのために、以下の 3 点を研究の目的とした。

(1) 図書館を適切に利用するための「教師用ガイド」を開発し、その効果を検証する。

(2) 担当教員と司書教諭が協働し図書館で授業を行い、子どもの情報リテラシーの習得度を調査する。

(3) 上記の検証をもとに、実際に小学校の図書館の学習環境をデザインするためのモデルを提示する。

この研究では、質問紙とインタビューによるデータ収集を行い、統計処理による仮説の検証と、質的アプローチによる分析の両方を取り入れる。

第 4 章では、図書館利用に関する「教師用ガイド」を司書教諭と担当教員の両者を対象に開発し、その効果を検証した。質問紙による事前調査の結果、情報リテラシーには習得しやすいスキルとそうでないものがあることが明らかになった。また、学校の規模により情報リテラシーの習得度に差が出ることも明らかになった。事前の質問紙の分析結果を反映させ、制作した教師用ガイドを利用してもらった後、事後の質問紙調査を行ったところ、教師用ガイドは教員にとって手助けとなり、子どもの情報リテラシーの向上に有効であることが確認できた。

第 5 章では、学校図書館において司書教諭と担当教員が協働して、情報リテラシーを指導する効果について検証した。協働するためには時間の確保が必要であるが、十分な取り組みがされていないのが現状である。情報リテラシーの内容を絞り込み、協働して指導すべき項目を精選し、その項目を重点的に指導することで限られた時間枠で協働の効果を高める方法をとった。司書教諭と協働して授業を行った学校と協働せず授業を行った学校において、授業を 1 年間実施した後、子どもに質問紙調査を行うと同時に、教員にインタビューを行った。その結果、司書教諭と協働して授業を実施した学校に効果が表れることがわかった。

第 6 章では、司書教諭と担当教員が協働して授業を行い、子どもに情報リテラシーを指導する学びの場として学校図書館を捉え、そのための学習環境のデザインを行った。まず、5 年生 62 名に質問紙調査を行い、情報リテラシーの習得状況を把握した。その結果をもとに担当教員にインタビューを行ったところ、「授業の成果を保存・展示できる」「常に新しい情報を入手できる」環境を整えてほしいという要望が上がった。これらの要望を組み入れ、図書館の構成要素である「授業」「情報・資料」「利用者」を有機的につなげ、授業で図書館を利用する環境を整えた。その結果、担当教員は図書館で授業を頻繁に行うようになり、子どもの情報リテラシーを育成できるようになった。

終章では、研究全体を振り返り、学校図書館における学習環境デザインをモデル化して提示している。とりわけ重要なのは、「授業」「情報・資料」「子どもと教員」の三つの要素をつなぐものとして、「教師用ガイド」と「司書教諭との協働」を置いていることである。さらに、「授業」と「子どもと教員」をつなぐものとして、ポートフォリオによる子どもの習得度を把握することの重要性が示された。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

塩谷京子の論文「情報リテラシー育成のための学校図書館における学習環境デザインに関する研究」について、以下審査結果の要旨を述べる。

本論文の特徴的な点として、次の 2 点をあげる。

第一の特徴は、小学校の現職教員として長年、図書館の管理・運営に関わってきた観点から研究テーマを設定し、実際に役立つための方策を学習環境デザインとして提示できた点である。従来、図書館は本好きの子どもが空き時間に読書をする場であると見なされてきた。その結果、授業時間中は図書室には鍵がかけられ、昼休みと放課後くらいしか開放されてこなかった。それが、法律の改正により、憩いや読書の場としての図書館から、情報リテラシーを身につける学びの場への変革が求められるようになった。

しかし、図書館に司書教諭の配置が義務付けられたにもかかわらず、司書教諭は本の整理に重点をおいた活動を従来通りしているだけで、学習の場という概念が学校に十分に浸透してこなかった。塩谷は、長年図書館担当の教員として運営にかかわり、実態を見てきた経緯から、何とか学びの場としての改革をしていきたいという強い思いを抱いていた。単に、司書教諭を図書館に配置し、研修を実施しても、それだけでは改革には繋がらないことを肌で感じてきた。そのような思いの中、関西大学初等部で図書館の整備をするという役割を与えられ､学習環境としての図書館をデザインすることに取り組むことができた。

これは、自身が司書教諭として、そして図書館を積極的に利用する教員としての経験を下地として、初めて浮かび上がっている問題意識である。言い換えると、最新のインターネット環境、十分な数のコンピュータ、沢山の書籍、新聞、資料などが配置されたからといって、最良の図書館が作られるわけではないということである。そこで活動をする教員や子どもたちの情報スキルやコミュニケーション能力を考慮し、司書教諭と担当教員の協働的な取り組みを支援する図書館にするためのデザインが必要になる。

研究の成果として、図書館を学びの場として機能させるため、教育理論や現場の意見を反映した学習環境としての図書館にすることができた。もちろん、関西大学初等部での試みをそのまま全国の公立学校に一般化することはできないが、学校図書館のあるべき姿を示すことができたと言える。これまで図書館の在り方を長期的に研究し、その研究成果をもとに必要な要件を示すことができたことは、これからの図書館教育に一つの方向性を示すことができたと言える。

第二の特徴は、図書館情報学と教育工学の二つの立場を融合して、学習環境デザインのモデルを提示した点である。

図書館情報学は、図書館への来館者に対して必要な情報を見つけ出すことを手助けすることを目指す学問分野である。現在では情報通信技術を活用した情報の整理や検索に重点が置かれ、来館者に適切な情報を提供することを研究している。主に、データベースを構築し、検索をしやすい分類方法などに関する研究を行い、適切な情報を効率的に検索し利用できる環境づくりと情報アーキテクチャの構築が主要なテーマとなっている学問領域である。

一方、教育工学は教育環境を整え、効果のある教育実践を行うことを目指した研究をする学問分野である。情報通信技術を活用した学習環境に関する研究に加え、効果的、効率

的な授業を展開していくためのインストラクショナル・デザインなど幅広く教育・学習について研究を行う領域である。教育工学は効果の高い教育を行うための技術を研究し、最近では子どもの学びの場を活動システムという枠組みで捉え、人工物、制度、役割、コミュニティなどの要素をどのようにデザインしていくかという観点から研究が進められている。

図書館に当てはめると、図書館を子どもの学ぶ場であると捉え直し、担当教員や司書教諭の役割、図書館内の資料や書籍及び情報通信機器などを組織化し、図書館を学習環境としてデザインしていくことになる。事例として取り上げた関西大学初等部では、学校全体で思考力育成に取り組んでおり、各教科において思考力を育成するための指導が模索されてきた。図書館での学習は、その取り組みを支える土台として機能していく必要があった。本研究は、図書館情報学と教育工学の二つのアプローチを取り入れ、思考力育成のための基礎力を育てる場として図書館をデザインし、その成果を上げてきたと言える。

これらの二つの学問領域は、隣接しているとはいえそのアプローチが異なるために、それぞれの専門家は、他の領域でどのような研究が行われているか、十分に把握できていないのが現状である。しかし、思考力育成という学校全体の目標とそれを支える情報リテラシー育成に向けて、二つのアプローチをうまく取り入れ、学習効果を高めることができたことは、実学としての本研究の成果であると言える。

以上の点を鑑み、本論文は博士論文として価値のあるものと認める。